

カリブ海の新しい波  
—ベネズエラと大統領チャベス—

New Waves in the Caribbean Sea  
—Venezuela and President Chávez—

黒 沢 惟 昭\*

Nobuaki Kurosawa

序

記憶の鮮明なうちにと考え、ベネズエラから帰国後まもなく二つの紀行文を書いた。一つは東京グラムシ会会報の『未来都市』（第46号、2009年10月30日）に寄稿した小文「カリブ海の新しい波」で、二つは『週刊読書人』のエッセイ「ベネズエラ大統領チャベスとの会見記」（2009年10月30日）である。本稿はそれらをもとに大巾に加筆、修正し付記を加えたものである。

〈はじめに〉

2009年3月に在日ベネズエラ大使館主催により、東京で行われた「チャベス大統領と日本の知識人とのミーティング」では、5人の学識者よりそれぞれの専門分野についてのレクチャーおよび、応答がおこなわれた。「憲法九条・芸術・アメリカと日本・アジアの経済状況・開発問題」学識者の方々からのレクチャーのテーマはマルチアングルで行われ、日本の社会・文化に対する理解、国際社会のなかでの位置づけが提示された。このことは、従来の「マネー経済・技術の国」といった日本のイメージとは違った認識をチャベス大統領に持っていただくことにつながったといえる。また、その後の応答では、大統領自ら、日本に対する認識やベネズエラ革命の実態についての

説明があり、参加した学識者の方々も、直に南米で進行している「あらたな社会建設」の息吹にふれることができたという点でも大きな成果をみている。この3月の会の直後より、「是非第2ラウンドをカラカスで」との発意が双方よりおこり、ベネズエラ政府大統領府、外務省、そして、在日大使館のご尽力により、今回、8月23日～29日の予定でミーティングを行う運びとなった。

第2ラウンドでは、カラカスでの開催という意味からも、より深く双方の「世界認識」「社会建設の思想」についての意見を交換し、これからの地球規模での模索をしていかなければならないオルタナティブな社会のありようについて考えていく。また、将来的にこうした日本の学識者とベネズエラの学識者、人々との交流をさらに深め、その果実を両国のみならず、様々な回路で世界に還元していくことを志向していきたい。

日本からの参加者

セイコーイシカワ駐日ベネズエラ大使（知識人会議プロジェクト代表）

市田良彦 神戸大学 教授

黒沢惟昭 長野大学 教授

木幡和枝 東京芸術大学教授

西谷修 東京外国語大学教授

日置一太 NHK チーフプロデューサー

\* 社会福祉学部教授

六本木栄二 デジタル放送技術専門家通訳

横田佐知子 通訳

(〈はじめに〉は打ち合わせ会の時にベネズエラ大使館から配布されたものである。)

### 《ベネズエラへ、そしてウーゴ・チャベス》

NHK スペシャルのプロデューサー日置一太さんから電話で「ベネズエラへ行きませんか」と誘われた時は突然だったので少々驚いた。ベネズエラが南米だということは知っていたがそれ以外は殆ど知識がなかった。ただし、大統領のチャベスについては反米主義でアメリカに対抗している国民的英雄だということは店頭での本の立読みで知っていた。アメリカ化というグローバリゼーションの潮流のなかで凄い人があるなあ、と感服し興味を抱いていた。

そのチャベス大統領にも会えると日置さんから聞き及んで俄に興味を湧いた。あとでわかったことだが、三月にチャベス大統領が日本へ来て樋口陽一氏ほかの知識人に会い、日本に好印象を持ち、再び日本の知識人に会うことを望み、とりわけ日本の発展に教育が果たした役割を語る者として私の名が上がったらしい。経緯はともかく推薦されたことは光栄で喜んで承諾したしだいである。(経緯については前掲の〈はじめに〉を参照)。

早速ガイドブックを買いベネズエラについてミニマムな知識を学ぶことにしたが、南米篇にもベネズエラの情報は多くない。以前購入したまま読んでいなかった、ウーゴ・チャベス&アレイダ・ゲバラ (伊高浩昭訳) 『チャベス ラテンアメリカは世界を変える!』(作品社、二〇〇六年)がとても参考になった。アレイダ・ゲバラはチェ・ゲバラの娘で日本に来たこともある。紙幅の関係で内容は紹介できないが、訳者による解説の要点を記したい。「ラ米の指導者として国際社会でいま言動が最も注目されているベネズエラ大統領ウーゴ・チャベスが、生い立ちや家族など私生活面について詳しく語り、有名なゲリラ指導者だったドゥグラス・ブラボとも接触した思想形成過程や、社会主義キューバの最高指導者フィデル・カストロとの盟友関係にも細かく触れていて、極めて興味深い。」(一九四頁)。さらに、チャベスが

グラムシに関心を持っていることも本書で知り、私の関心は増した。チャベスは次のように述べる。

「グラムシが危機について表現したように、葬られるべきものを葬るのだ。言い換えれば、何かが死につつあるとしても簡単には死なないということだ。同時に、何かが生まれつつあっても実際にはまだ何も生まれていないということだ。私たちは、死ぬべきものを埋葬し、生まれつつあるものを誕生させなければならない。道は依然遠いが、私は挑戦する。」(なお「注」には次のように記されている。「真の危機は、何かが死につつありながら死にきれず、同時に何かが生まれつつあるが生まれきっていないときに起きる」というグラムシの言葉をチャベスは好んで引用する(一五八頁、この引用からもチャベスはグラムシをよく読んでいると思う。ベネズエラの現状を思えばグラムシの眼で自国を読んでいるようにも思える。))

### 《地球の向こう側の国》

今回のベネズエラ訪問のメインの目的は「インテレクチュアル・ミーティング」、つまり日本の研究者(私を含めて4人、〈はじめに〉参照)が同じ分野の先方の研究者とそれぞれ交互にスピーチを行いそれに基づいて討論するという趣向でコーディネーターはもちろん日置さんである。それに駐日ベネズエラ大使セイコー・イシカワ氏と通訳が同行した。八月二日(土)19:00に成田を出発。北京、フランクフルトで飛行機を乗り継いで二三日の15:30(現地時間)にカラカスのシモンボリバル空港に到着した。13時間の時差、待ち合わせの時間(トランジット)も入れて約25時間のフライト。少々疲れたが幸いビジネスクラスだったのでフランクフルトではラウンジのシャワーを浴びることができた。(ルフトハンザの食事のおいしさが印象に残っている)座席も寝台になるので睡眠も思いのほかよくとれ、大いに助かった。

### 《カラカス到着》

遂に南米の地に來たか、という感慨はあまり湧かなかつた。「あれがカリブ海ですよ」。日置さん

の説明に、カリブ海を目のあたりにする。ああ、ここはカリブ海の沿岸の国なのだという思いを深めた。出迎いの外務省の車は、緑の中、山間のハイウェイを走る。四〇分ほどで、高層のビルが林立する首都カラカスの市街に入る。人口は四〇〇万、標高は千メートル近く、湿度が少ないのでしのご易い（気候はほぼ東京と同じだと聞いてきたのでからりとした感じは意外だった）。ほどなく、グラン・メリアという5つ星のホテルに到着。以後4泊することになる私どものホテルだ。警備の厳しさが印象に残った。

### 《インテレクチュアル・ミーティング》

シンポジウム（インテレクチュアル・ミーティング）は、翌二四日（月）11時から市内の文化会館で開かれた。記念講演はノーム・チョムスキー。高名な哲学者の人気もあってか聴衆は四〇〇人を越え会場は満席だった。静かなメモを読み上げるような講演だったが、私の語学力を棚に上げて場内は騒々しく殆ど理解できなかった。ただし、オバマは期待できない。ブッシュよりましなだけだ、という趣旨のことをくりかえしたように思う。同行の一人に確かめたところ、持論のくりかえしだ！といわれた。

軽い昼食後にシンポジウムが始められた。前述のようなスタイルで、社会運動、教育、マスメディア、芸術文化、社会思想の分野順に進められた（メディアは日置さんが担当）。残念ながら自分の報告のことで頭が一杯で他のスピーチのメモを取る余裕がなかったので概要すら紹介することができない。（報告要旨については《付記3》を参照）私は、日本の教育は新自由主義が推進され、そのため教育の格差化が顕著になっているとまず現状を述べた。続いてその発端は八〇年代半ばの臨時教育審議会であった。それは、当時のイギリスのサッチャーリズムの継承であり、一面では官僚（国家）支配からの解放を目指したが、その方向は市民社会ではなく市場社会であった。その後小泉構造改革がこの流れを徹底化させた。そのために格差化は必然的であったと結んだ。これに対して、フロアから対抗運動はないのかという質問が寄せられた。もちろん、ある。教員組合が中心になって、市民と連携して市場主義ではなく市民

社会のヘゲモニーによって教育における社会的公正を実現しようという運動も進められている。まもなく日本では総選挙があるが確実に政権交替は実現し、その政権には対抗ヘゲモニーに属する勢力も加わるので、新自由主義に一定の歯止めがかかるだろう。私は以上のように答えた。（付記3を参照されたい。）

自分のことだけで恐縮であるがシンポは休みもなく五時間以上も続き四〇〇人近い参加者も殆ど帰る者もなく、騒々しさはともかくその熱意に驚いた。なお、チョムスキーの講演も含めて全てテレビで中継された。私の対のベネズエラの教育学者（ミゲル・アンジェルとプログラムには記されている）から、『国家の可能性』というタイトルの自著を献呈されたがスペイン語なので読んでいない。長途の旅の翌日、長時間の緊張で相当疲れたが、今回のメイン行事が無事終了しほっとして宿舎へ戻った。バイキング式の食事私の口に合い、時差ボケもなく眠れた。

### 《キューバ人による医療活動》

翌二五日（火）は市内見学。案内されたのは「バリオ」と呼ばれる低所得者の居住区である。そこではキューバ人医師が医療活動を行っている。診療所というより小規模の総合病院といった方がよいと思われる病院には多くの患者が静かに待合室で診察を待っていた。われわれを物珍しげに見ながら。そこではキューバの医者が、途中からベネズエラの医師も加わって院内の施設を回りながら活動を詳しく語ってくれた。「バリオ・アデントロ」（「その中に入って行く」という意味）活動である。前掲『チャベス』にはこうある。「この居住区の20万人の住民は、四〇年間も医師なしで暮らしていたのだ。病気になれば病院に行くが、診察を待ちながら死ぬ者もいた。妊婦は床で出産し、子どもは喘息や下痢で死んでいった。だがいまや、彼らには医者がいる。その居住区には、一時間以内に医師の元にいけない住民はいまや一人もいない。そのうえ医師は薬品を用意しており、住民は買う必要がない。」（七九頁）。二人の医師が静かに語る感動的な話には私は聞き惚れ、不覚にもメモをとることを失念した。そこで文献によって要点をかいつまんで説明しよう。

「二〇〇三年四月一六日、ベネズエラとキューバの間に協定が結ばれ」「居住区に入ろう計画」が始まった。現在、「キューバ人医師・看護師二万五〇〇〇人」がこの協定によりこの計画に参加している。いずれも単身赴任である。「彼らは、月二〇〇ドルの報酬を受け取るが、わずかな額である。ベネズエラの最低賃金が、一八三ドルであることからすれば、いかに少額であるかがわかるであろう。そして貧民街や僻地での生活は厳しい」。その他、両国の協定により、「二〇〇〇年以降八〇〇〇人以上の重病・難病患者（付添い一人とともに）キューバで無料の治療を受けている。」その成果は次のようである。「〇二年と〇四年とを比較すると、平均寿命は七二・五七歳から七三・一八歳に、識字率は九〇・九〇%から九五・〇〇%に、一人当たり国民所得は二八五八ドルから三九二四ドルに、総合指数は〇・七一から〇・八〇に上昇している」（新藤通弘『革命のベネズエラ紀行』新日本出版社、二〇〇六年、七四―七七頁）。「社会主義連帯」、「人民奉仕」、日本では死語になりかけている言葉を思い出して、診療所を後にした。いつか再び南米に来る機会があったら是非キューバも訪れたいと念う。因みに、前出のゲバラの娘もキューバの医師である。

### 《住民集会》

そこから車で狭い坂道を登ると、広場に大きなテントが張られ、パリオの人々が大勢拍手で私たちを迎えてくれた。老若男女を問わず、われもわれもという感じでマイクを握りチャベス革命後の生活の改善状況を語ってくれた。日本には公民館、地区センターがあって集会が活発ではあるが、高齢化が進み、若者の個人主義が進んでいるので、皆さんのような世代を超えたこのような結びつきを目のあたりにして大変感動した——求められてこうあいさつしたが率直な感想である。案内役は地域担当省の若い副大臣の女性である。昼食は地域担当省で女性大臣から屋上のテラスでご馳走になった。デザート甘さが印象に残っている。

### 《大統領との懇談》

帰国前日の二六日は大統領官邸でテレビ中継の

もとチャベス大統領との会見が実現した。ベネズエラのトピックスはまもなく隣国コロンビアに設置されようとしている米軍基地である（付記4参照）。しかし、われわれは武力によって対抗しない。平和の基地をつくる。こう語り出した大統領は、国境近くの平和基地（集会）をテレビ実況で紹介し、コロンビア国民はきょうだいである。

（一時期ベネズエラはコロンビアと同じ国であった）皆さんとは決して戦わない。相手はアメリカ帝国主義だ、と平和基地の人々と同時にコロンビア国民にも呼びかけたのには驚いた。それが終わると大統領自らの司会で私どもの紹介に移った。献呈したグラムシの拙著『アントニオ・グラムシの思想的境位』を手にして、グラムシの「歴史のプロック」にはとくに関心がある。南米全体に歴史のプロックをつくりアメリカの軍事的脅威に対抗したい。この本をスペイン語に翻訳して読みたい、といわれ列席の高等教育大臣に指示したことに恐縮しつつ感動したしだいである。

日本には平和憲法がある。その理念は大統領の考え方と一致している。前日にはバリアを見学して大変感動した。民衆のヘゲモニーによる社会変革はグラムシ思想の根幹である。私は平和憲法の平和主義の理念を生かすためには一国だけでは不可能で、アジアの連帯を志向し、そのために「東北アジア共同の家」の実現に努めている（拙稿「東北アジア共同の家を求めて」『季刊教育法』No.158～162, エイデル研究所を参照）。ベネズエラへ来てその連帯をベネズエラへ、南米にまで広めなければならない覚悟を新たにした。その機会を与えられたチャベス大統領、ベネズエラ国民に心から感謝する。いささか興奮気味で以上のようなあいさつをした。（静かな黒沢さんが一たびマイクを握ると人が変わったように熱弁になりますね、とアルゼンチンから来たジャーナリストに冷やかされた）なお、一人の参加者は沖縄の現状を紹介し大統領が強い共感を示した。予想外の大統領との会見の進行に驚きながらもはるばるとベネズエラへ来たことの幸せを実感し、大統領と固い握手をして官邸を退出した。会見は三時間近くに及んだ。

帰りは二七日夜方外務省の職員に空港まで見送られベネズエラを出発エールフランス機でバリ

(ドゴール空港)で飛行機を乗り継ぎ二九日朝8:10に予定通りに成田に到着。短くはあったが充実したカリブの国の旅の終りである。

語りたいこと記したいことはなお多々あるが、すでに予定の紙幅を越えてしまった。残念ながら他の機会に譲りたい。得がたい幸運を与えられた日置さん、駐日ベネズエラ大使、同大使館に心から感謝の念を表して小論を結ぶ。

#### 《付記1》

大統領と会見した日の午前中、駐日大使の案内で、カラカス市の西部地区のセントロ(下町)といわれる旧市街へ向かった。その一区画に南米の英雄ボリバルの生家がある。

ベネズエラのいたるところでボリバルの銅像を見かける。シモン・ボリバル(1783~1830)については、ホセ・ルイス・サルセド=バスタルド・水野一[監訳]『シモン・ボリバル ラテンアメリカ解放者の人と思想』(春秋社、2008年。帰国後に大使館から贈られた。)を参照されたい。大巻なので、前出の新藤氏の著書によって要点を紹介したい。「一般には、彼の家庭教師、哲学者のシモン・ロドリゲスからフランス啓蒙思想の影響を強くうけ、政治面ではスペイン植民地からラテンアメリカを独立させた『独立の父』、『解放者(リベタドール)』であり、共和国を推進し、ラテンアメリカの統合を夢見た英雄と紹介されている。

しかし、ボリバルは、政治的な側面だけでなく、経済的側面、社会的側面でも『解放者』であった。経済的側面では、大土地所有の解体と協同組合農民の創出、資源(鉱山)の国有化を主張し、社会面では農奴制に反対し、奴隷解放を進めた。こうしたボリバルの多面的な『解放者』としての側面をチャベスは評価して、自らが推進する社会改革の総称として『ボリバル革命』と呼んでいるのである(前掲書二八頁、但し注は省略)。

チャベスは、「制憲議会開催」を公約に掲げ、民衆参加によるボリバル改革を主張し、1998年12月初挑戦で大統領の座を勝ち取った。政権に就いたチャベスは、公選による制憲議会を召集し、

新憲法は1999年末、国民投票で可決された。この憲法とともに、ベネズエラは「ベネズエラ・ボリバル共和国」と変わった。チャベスの革命については稿を改めて論じたいが、ベネズエラで「内発的発展」という言葉をよく耳にした。これは、東南アジアの事例と若干違い、地域住民が政府や地方自治体の支援をうけて発展を目ざすという主旨である。とくにそれは前出の「バリオ」において顕著に見られる。因みに、「バリオ」とは英語の「スラム」や日本語の「貧民窟」とは異なり、「周縁に生きる人びとが、主流社会に対抗しつつ、自律的に構築した地域社会」という誇りがこめられているという(石橋純「叛乱の記憶、路上の政治 チャベスの『革命』とベネズエラ民衆」『現代思想』2008・5)。この誇り高き「バリオ」の民衆に依拠して「エリート政治体制」を变革しようというのがチャベスのボリバル改革の中核ではないかと私は考える。ボリバルの記念館には、様々な遺品、肖像が飾られ、小一時間にわたってガイドの熱心な説明を受けた。折角の見聞を前出の伝記と関連させて反すうし、それをチャベスはどうか自らの思想に接合したか。因みにチャベスは自らの革命をボリバル革命と呼んでいるが、大いに興味があるところである。

#### 《付記2》

##### 【シンポジウムの構成】

アジアとラテンアメリカ「あらたな世界の挑戦」

～ネオリベラリズム以後の社会はいかにあるか～

日時：8月24日(月)16:00~20:00予定

会場：400人収容のホール

ベネズエラの研究者がモデレーターをつとめ、日本5人、ベネズエラ5人の計10人のパネラーが登場。5つのテーマごとに、日本・ベネズエラの双方のパネラーが10人ずつの提言。その後、20分の質疑応答を行う。

- ① パネラー紹介 一言ずつ、挨拶とこのシンポへの期待感
- ② テーマI 「世界史のなかのベネズエラ革命」

- ・西谷 提言10分
- ・ベネズエラ側提言 10分
- ・パネラー意見交換 20分
- ③ テーマⅡ 「あらたな社会を作る教育とは」
  - ・黒沢 提言10分
  - ・ベネズエラ側提言 10分
  - ・意見交換 20分
- ④ テーマⅢ 「芸術と社会運動」
  - ・木幡 提言10分
  - ・ベネズエラ側提言 10分
  - ・意見交換 20分
- ⑤ テーマⅣ 「公共をつくるメディアとは」
  - ・日置 提言10分
  - ・ベネズエラ側提言 10分
  - ・意見交換 20分
- ⑥ テーマⅤ 「新たな社会運動の潮流」
  - ・市田 提言10分
  - ・ベネズエラ側提言 10分
  - ・意見交換 20分
- ⑦ 会議まとめ
  - ・会場質疑応答 10分
  - ・日本側 西谷 5分
  - ・ベネズエラ側 代表 5分

(注：実際の進行とくに各報告は20分近くを要した—黒沢)

### ≪付記3≫

#### シンポジストの報告要旨

■西谷 修 「近代世界史的視野からみるベネズエラ革命」

#### 要旨メモ

ウーゴ・チャベス大統領とともに始まった“ベネズエラ革命”の歴史的意義を、西洋中心主義とは違う批判的世界史の観点から考える。

まず、近代の世界史を、西洋 (Occident) を起点とし主体とする世界化運動の展開として捉える。16世紀以降のこの運動の端緒で、ヨーロッパ人によって“新大陸”が“発見”され、“アメリカ”という“新大陸”が地上に作り出される。“アメリカ”は北と南とでは、別の展開をみる。北では、近代西洋文明の移植が移民たちによって

行われ、“フロンティア”によって先住民は掃討される。その支配域が“自由”の制度空間として拡張され、やがてこの空間は西半球全体を包摂するものとされる。ただしこの“自由”は、“所有”による自然の支配と“経済”的自由を本質的特徴とし、その“正当性”拡張する傾向をもつ。

南では“征服”は行われるが“根絶”にはいたらず、あらゆるレベルで“混交”が進み、“クレオール”的独立の枠組みの中に別の社会的・文化的諸要素が残る (醸成される)。

“ロシア革命”以来の社会主義革命の枠組みに従って理解すべきではない。それは西洋近代の産業的社会システムの要請に従っているものだから。むしろそれは“メキシコ革命”の延長上に理解すべきもの。それは資本主義社会の矛盾が生み出したものというより、孤立した個人の“自由”と、その競争から生まれる“効率”を原理化していく西洋的産業主義が、その端緒で押しつぶした一世界の住人たちの“自立 (autonomy)”の意志の発露だと、とりあえずいうことができるだろう。だからこそ、その路線は近代産業主義批判のあらゆる経験を汲みながら、別の権利を模索しつつ地域的な“自立”と他者との共働を求める。

合衆国が代表する“アメリカ”は西洋の脱一歴史的な理想型を具現しているが、ベネズエラがいま代表しようとしている“アメリカ”は、それと違った形での“アメリカ”の世界史への参入を告げている。現在のベネズエラの試みを“社会主義”的といってもいいが、それには収まりきらない要素を孕んでいる。

挫折した西洋諸国の帝国主義に代わって、アメリカ合衆国は“自由”のレジームを広げることによって、西洋的植民地支配を更新した。グローバル化する“自由経済”によって維持されるのは衣装を変えた世界統治のシステムである。その歴史的プロセスのあらゆる傷を負いながら、ベネズエラの現在は16世紀に地球上に作り出された“アメリカ”の、別の可能性を切り開こうとしている。

(注：西谷氏の考えは現地でも個人的にもうかがったが大変興味深かった—黒沢)

■黒沢惟昭 戦後日本の教育 その功罪を超える

道

- ① 教員について現場の教員による「教育研究」に学ぶ教育の原点
- ② 教育政策の動向
- 1) 臨時教育審議会(1980年代半ば)→新自由主義の教育への導入と推進
  - 2) 戦後社会の構造変化 高度消費社会の到来
  - 3) インストメンタル型→コンサマトリー型「新人類」の出現(1977年頃)
  - 4) 勉強の苦しみ→子どもは学び 楽しみを求めた  
勉強は無理をすること→日本は目的を喪った「寂しい国」になってしまった。
- ③ 勉強からの逃走
- 1) 国家・地方財政の悪化
  - 2) 学校教育→生涯教育
  - 3) 弱者の切り捨て(市場競争主義の必然化)
  - 4) 中退と不登校の増大傾向
  - 5) 国民の再統合のための「愛国心」の強調(指導要領の改訂)
- ④ 「学び」の複権
- 1) 学力 生きる力→「ゆとり教育」
  - 2) 学校への参加 消費者→教育課程の支援
  - 3) 地域社会で地域をまなぶ 総合学習
  - 4) 学校評議会スペイン、イタリア、川崎市「地域教育会議」(学校自治の提唱)
- おわりに  
教育への期待 「教えること」の意味の捉え直し(勉強→学び)、「同僚性」による職場の連帯  
カリキュラムセンターの活用(教員の力量の形成)
- (詳しくは拙著『教育改革の言説と子どもの未来』(明石書店、2002年)を参照)

#### ■木幡和枝 芸術と文化運動

——日本の近代化過程でのナショナル・アイデンティティの変遷について(とくに若者の)  
——祖国から世界へ意識拡張が進むにつれ、約束なり連帯の軸が民族や国家から価値観、文化、サブカルチャーへ移行。集団より個人の選択が浮

上。

——芸術・文化におけるサブカルチャー化優勢の光と影。

少数派と多数派、内向と開放、均質化と商品経済的選択肢の増大。

——Hi & Low culture、オタク、萌え、ロスジェネ、レトロ

——生命活動/共同体としての文化、自己言及としての文化

#### ■市田良彦:「21世紀の社会主義運動とは?」

20世紀の社会主義(ヨーロッパ的な社会民主主義)あるいは共産主義(中国を含むスターリン主義的な)は、国家権力による「上から」の社会変革を金科玉条としてきた。その結果、民衆の生活に深く根ざした「下から」の民主主義の内生的発達を阻害し、国家主義やナショナリズムを亜流に変貌してしまった。代表機関としての「国家」と、民衆の自己統治をどのように関係づけるのか。この関係のなかで、今なお大きい「階級」の問題をどのように扱うべきなのか。ベネズエラ革命は世界中の「左翼」政治にとって、こうした問題をめぐる比類なき「実験」のように見える。敗北の連続であった日本の左翼運動の歴史にとっては、学ぶべきところ、期待すべきところがとても大きい。相互の経験と教訓を交換しながら、これからの「左翼」政治について世界的レベルでの論議を行いたい。とりわけ、90年代半ばからの、新自由主義に対する世界的抵抗運動(オルタ・グローバルイゼーション運動)の現状をどう評価するかは、重要な論点であると思われる。様々な路線的分岐が現れはじめており、異なる諸傾向がこれまでのように「幸福に」共存することも難しくなるかもしれない。左翼運動が一国規模で完結することがもはや完全に不可能な今日にあって、どのように世界統一戦線を作っていくのかはそれぞれの国の運動にとっても死活問題のはずである。共に闘いを続けていくための「理念」や「思想」についても論議したい。

#### ■日置一太 「公共をつくりだすメディアはいかにあるべきか」

このセッションでは、まず、ケーススタディーとして「岐路にたっている日本のテレビメディア

の現状」を報告し、それがネオリベリズムに覆われた世界共通の状況であること、また現在テレビ放送が直面している問題は、メディアが本来もっている「公共（空間・概念）の創出」という民主主義の実現にとって重要な役割の危機を意味しているのだということを確認したい。その認識の上で、オールタナティブなメディアも含めて、あらゆる角度から「公共を作り出すメディアはいかにあるべきか」その可能性について議論していきたい。日本のメディアは、全国ネットをもつ民間放送局4社と公共放送であるNHKからなる。第二次世界大戦後の社会、政治状況を形づくる上で大きな役割を果たしてきたこのテレビメディアが放送開始以来という危機に直面している。大きな理由は2つある。①通信テクノロジーの進展：インターネットおよび携帯電話などのコミュニケーションツールの伸展による試聴慣習の変化、昨年、日本では携帯電話の普及が1億台を突破、老若男女あまねく広がるメディアとなった。それにともない、平均で1日2.5時間テレビを試聴してきた市民がテレビ離れをおこしている：日本国内で2008年におこなわれた調査では、インターネット、テレビ、新聞の3つのメディアのアクセス時間で最長はインターネットとなった。②新自由主義な構造改革圧力：デジタル化の波と同時に、放送局に押し寄せるネオリベラルな「改革」や→編集・編成権がマーケットに奪われていく現状がある。結果として本来メディアがもつべき「調査報道「Investigative Reporting」能力は減衰していく。社会の多様性を反映し、マイノリティー（少数意見）が尊重されるメディアの有り様が、市民のコミュニケーションを活発にしていこうとするならば、前述の状況のなかで、消費的選択の多様性というみせかけの「自由」を大量に生産することに終始していくテレビメディアの行く末には、自立した市民の連帯ではなく、分断された「消費者」としての集団しかうまれないのであろう。メディアが脆弱化した社会に何が起こるのか、その一例をあげるならば、「イラク戦争」である。ブッシュ政権は、徹底した情報管理と操作で9.11以降の対テロ戦争、とくにイラク戦争への世論誘導を行った。イラクの大量破壊兵器の脅威が喧伝され、サダムフセインとアルカイダが関係

あるのかのキャンペーンがはられた。アメリカのメディアは批判能力を失い、既成事実のようにそうした情報を垂れ流し続けた。それは、軍産複合体による圧力であるとか、米政府によるなにがしかの強制力をもった指示ゆえとはおもえない。脆弱化したメディアはみずから戦争の遂行に荷担したのである。ブッシュ大統領は戦争をしかけ、メディアはそれを「商品」として買ったのである。ではいかにして「公共」を作り出すメディアは可能か、アラブ社会におけるアルジャジーラ、南米におけるテレスール、韓国におけるインターネット新聞・オーマイニュースなど、世界の多様なメディア、そしてNHKやZDF、RAIなど公共放送も俎上にのせつつ議論をふかめていきたい。

（付記2、付記3は打ち合わせ会の折に大使館からいただいた資料をそのまま掲載したことをお断わりしたい。）

#### ＜付記4＞

米・コロンビア

##### ■基地使用協定を締結

【サンパウロ=片山亜理】

南米のコロンビアと米国は10月30日、米軍が麻薬対策作戦の拠点としてコロンビアの基地を使用可能とする協定を、結んだ。隣国のベネズエラやエクアドルなどの左派政権が反発している。

AP通信などによると、協定は、コロンビアにある7基地を今後10年間、米軍が利用できるという内容。同国内には現在すでに、米軍兵士や軍事関係の業者ら約630人が駐留するが、1400人まで増員出来るとしている。（2009.11.1朝日新聞）

（日本におけるベネズエラの情報はきわめて少ない。帰国後に目にしたわずかな報道記事である。参考までに「付記」として紹介する。）

#### ＜付記5＞

大統領への道

南米の政情不安はよく知られている。軍人だったチャベスも、1992年に時のベレス政権にクーデターを企て頭角を現した。叛乱は失敗に終わったが、テレビで投降を呼びかける姿は堂々としていて、その責任ある態度が逆に国民の敬意を集めた。その後、特赦を得たチャベスは「制憲議会開

催」を公約に民衆参加の革命を主張。98年12月、初挑戦で大統領の座を獲得。政権に就いたチャベスは、公約の制憲議会を召集。新憲法は92年末に国民投票によって可決された。かいつまんでチャベスの政権奪取の経緯を述べたが、背景にはペレスの政策の失敗、その被害を押しつけられた下層民衆の強い支持がある。

80年代の経済危機の救済をペレスは国際通貨基金に仰ぐが、見返りとして「構造調整案」を受け入れた。つまり新自由主義政策である。これによってベネズエラ経済は活気づいたが、一方で貧困層の生活は窮迫した。89年2月の「カラカス暴動」の原因はここにある。ペレス政権はこれを徹底的に弾圧・鎮圧したが、新自由主義のもとで切り捨てられた下層民の反抗のエネルギーがチャベス政権を支えているといっても過言ではない。

世界有数の産油国、それに依存するアメリカのジレンマを勘案しても、内外の厳しいパワーポリテックスの最中で平和主義によるアメリカへの対抗というチャベスの信念は評価されるべきであろう。わずかの見学ではあったが本文中の「バリオ」の人々のなかにチャベスの改革への支持を垣間見た。

#### 〈付記6〉

ベネズエラ・イラン大統領

##### 【リオデジャネイロ共同】

イランのアハマディネジャド大統領は南米3カ国歴訪の最後の訪問先であるベネズエラに到着し、25日、首都カラカスの大統領府でチャベス大統領と会談した。両首脳はとても過激な反米指導者で、記者会見では米国を「帝国主義」と批判、互いに「反帝国主義の闘士」とたたえて氣勢を上げるなど、親密さをアピールした。

イランはベネズエラの自動車組立工場やウラン鉱床探査などに協力。一方、産油国ベネズエラも、精製施設不足でガソリン輸出を決めるなど最近関係を緊密化している。

今回もエネルギーや貿易など幅広い分野での協力を確認したとみられ、アハマディネジャド大統領は「われわれはずっと一致協力していくつもりだ」と表明した。

両国の接近にはベネズエラの人権団体などから

懸念の声上がり、この日、カラカスのイラン大使館周辺などで学生らがデモ行進した。（「信濃毎日」09.11.26夕刊）

（「付記4」も同じであるが、私が現地で見聞したところでは、ベネズエラの置かれている状況を勘案すると視点の違いを感じず。南米の歴史的背景についての理解がないと何故反米になるのかという点が正確には理解できないのではないかと）

#### 〈おわりに〉 — 「あとがき」にかえて —

今回のベネズエラへの旅は全くの僥倖であった。しかし、唐突であったために準備不足を免れず帰国後にそのことに思い至り、折角の機会を充分にいかすことができなかつた悔いが多く残る。今後のために思いつくままにその一端を記しておきたい。

1. 文中でも述べたが、南米（ラ米）に対する認識不足である。渡航まえに買い求めた、E・ガレーノ・大久保光夫訳『収奪された大地』（藤原書店、2009年）は充分読み切れなかつた。500ページ近い大著であるが読み進むごとに題名通りの「収奪の歴史」に息を飲む思いであった。概要すら紹介するスペースはない。とりあえず「訳者あとがき」から共感する次の一節を引用するにとどめる。

「先進国という言葉が無限定に使うことの危険性である。……この言葉には高い生産力や秀れた技術水準、豊富な資金量、豊かな生活といったことのほかに、道義的にも文化的にも最先端にたつ国というプラスのイメージがつきまとうように思われる。ところが、本書のなかで詳述されているように、それぞれの時代の『先進国』こそが自国の利益のみを追求して資源の豊かな貧しい国を収奪していったその貧困に陥れ、抵抗があれば武力干渉その他の卑劣な手段でそれを圧殺してきた張本人である。……『先進国』の豊かさは、しばしばラテンアメリカ諸国からの収奪の結果であって、いわゆる先進国が道義的にも秀れているなどとは到底思えないのである。」（P.468～469）

「現代においては一六〇を超える世界の独立国のうち、一三〇国余りが属する第三世界を学ばないことには世界は見えないだろうし、したがって世界を語る資格に欠けることになるのではない

か。第三世界のなかでもっとも代表的な言語のひとつがスペイン語であろう。まずはこの言語を学んで第三世界理解の足掛りにし、ついで世界のトータルな理解を心がけようではないか。……ラテンアメリカはすぐれて、日本を含む『先進国』、発達した資本主義国の実像を映しだす鏡なのである。」(P.469)

私はこれまで、遅ればせながら「障害者」教育などをはじめ人権教育に関心を持ち、さまざまなプロジェクトに携わるなかで、「健常者」、「日本人」中心の私の教育研究の限界を思い知らされたことがある。またかつて、鶴見良行『バナナと日本人』(岩波新書)を学生と一緒に読んだときも、訳者が述べていることの一部を感じたことがある。チャベス大統領との会談でも南米とのネットワーク、連帯を痛感すると述べたが、短い旅の、ささやかな体験ではあるが、グローバリゼーションのなかでその視界から日本を考えることの必要性を思い知らされた。今度の旅、大統領との“意気投合”を、そして後論の「バリオ」の見学を今後の私の研究の新しい方向への契機としたいと念ずる。

因みに本訳書の帯に、「ラテンアメリカ史の超ロングセラー オバマよこれを読みなまえと、チャベス(ベネズエラ大統領)がオバマに突きつけた究極の1冊」とあるが、記念講演中のチョムスキーのアメリカ批判と重ねあわせると改めて共感を禁じえない。

2. チャベスの政権の成立の背景には、89年の「カラカス暴動」があり、それを引き起こしたのは、80年代のペレスの「構造調整案」の受け入れ(国際通貨基金の見返り)であることは《付記5》で述べた。この「調整案」は新自由主義である。つまり、日本に先駆けてベネズエラは新自由主義政策を導入し、その結果、弱者の切り捨てが行われ「カラカス暴動」が起こったのである。帰国後に、これはベネズエラだけでなく、ラテン・アメリカ全体に生じた悲劇であることを知った。この事情を私は次の二つの書から学んだ。内橋克人、佐野誠『ラテン・アメリカは警告する「構造改革」日本の未来』(新評論、2005年)、篠田武司、宇佐見耕一『安心社会を創る「ラテン・ア

メ」リカ市民社会の挑戦に学ぶ』(新評論、2009年)。日本における新自由主義の推進(小泉構造改革)の失敗については最近多くの分析、指摘が公刊されている。なかでも本書の中心的論者は、一貫してその新自由主義政策批判を行ってきた内橋克人である。二つの書の内容を紹介する紙幅はないが、要するに前述の「ペレスの失敗」はベネズエラだけの現象だけでなく、ラテン・アメリカ全体が経験したことである。

なぜこのような政策を導入したのか。なぜ失敗したのか。そしてそこからいかに学び、新しい道を進もうとしているのか。如上の二書はそれを詳細に分析した共同労作である。そこには日本の未来が示唆されている。ここでも1で述べた「先進国」とはなにかをつくづく考えさせられる。ただし、これらの共同研究にベネズエラは登場しない。二書に学んでベネズエラの歴史と状況を考え、さらに日本の未来をしっかりと考えたい。ここではこの点の確認にとどめたい。因みに、日本の近況については次の書に多くの示唆をうけた。宇治弘文、内橋克人『始まっている未来 新しい経済学は可能か』(岩波書店、2009年)

3. 今回ベネズエラで、チャベス大統領の会見とともにもっとも印象深く強い関心を抱いたのは、バリオであった。残念ながら、その学校、識字の実情を見学することはできなかった。一端は、日置さんから頂いたDVD「NHKスペシャル 21世紀の潮流 ラテンアメリカの挑戦 脱アメリカ宣言～ベネズエラ・7年目のチャベス革命～H18.7.21」に映し出される。帰国後繰り返し学生と一緒に見た。チャベス革命の成功、さらにその未来はこのバリオにあると思う。これについて帰国後に読んだ石橋純『太鼓歌に耳をかせ』(松籟社、2006年)は、バリオを知るには必読の好著である。著者はバリオについてこう述べる。「この地方のスペイン語で『バリオ』(bario)とは、都市最下層の地域社会を意味する。バリオには、国内の農村部や国外から経済的機会を求めて移民たちが集い住む。そこには、一般に、貧困や犯罪など、都市の否定的なステレオタイプとともに想像される空間である。同時にバリオは、西欧近代の価値観とは一線を画した民衆文化が実践さ

れる場でもある。日々の暮らしのなかで、書きことばより話しことば、言語より身体、論理より感覚、型どおりの振るまいより当意即妙の機転が、生彩を放つ——そのような流儀で人びとの絆が維持・更新される社会空間、それがバリオなのだ」（同、P.24）。著者は、「サンミジャン」という典型的な港町のバリオを中心に、上記のバリオの特色を詳細に述べる。ここには、2で紹介した内橋の共同研究には欠落しているベネズエラの「これまでとこれからが」、バリオに定位して語られて

いる。570頁に及ぶ本書を、今回の旅で垣間見たバリオを思い浮かべながら一気に読み通した。読者にも是非一読を奨めたい。

以上、3点に限って、私の今後の研究の方向を記した。以上で小論を終えるが是非いま一度ベネズエラを訪れたいという気持ちにかられる（完）。〈はじめに〉、付記2、3の資料については打ち合わせの折に大使館から配布された資料である。便宜をはかっていたいただいた大使館に御礼申し上げます。